

〔攝津志西成郡〕關梁 難波橋在天神橋西長八十丈許中略跨大河

〔北禪文草四〕東歸紀行

天明三年癸卯、以酌之職既滿、五月略二十日卜吉上船、中三日略七月、至申時、浪華城邑已歷、歷

目前、暫候潮而入江口、比至安治橋、殆甲夜矣、四日對邸使者、裝樓舫來迎、駕至難波橋、邸吏迎於岸、入邸有饗如例、

高麗橋

〔攝陽群談七〕高麗橋 同所橋今次ニアリ、東ハ内兩替町、西ハ高麗橋壹町目ニ涉ル處ナリ、高欄疑實現ア

〔駿河土産四〕大坂冬御陣之時、城方より下筋自燃之事

大坂冬御陣の節、城方より下町筋を自燒致し候刻、高麗橋をも燒落したりとも申、又左様には無之とも申、一圓儀定不仕候に付、小栗又市見分致し候へば、罷越候て高麗橋は其儘にて有之候と申上候得ば、被遊御聞、若高麗橋をも燃落候に於ては、城中の奴原悉むし殺にしてくれんとおもひつるにとの上意にて、何とて使番の者共は見届ざると仰有ければ、又市いづれも臆病共に候故、近く寄て見候へば、鐵炮の當るべきかと存、遠くより見候に付ての事に候と申上ル、

〔東照宮御實紀附録十四〕慶長十九年十二月廿九日、仙波と總郭の橋ども城兵みな自燒して、今橋と高麗橋とのみ残りしを、石川主殿頭忠總是を燒せじとて、高麗橋の詰にて鐵炮放して防守せしが、城方よりも同く銃丸烈しく打かけ、忠總が士卒疵蒙る者あまたなれば、使番小栗又一忠政馳來て注進し奉る、永井右近大夫直勝も御前に在て、阿波勢近邊なれば、忠總に力を合せ、橋を救はしめんといへば、御けしき損じ、其方どもはあまりに軍法を知らぬぞ、此橋はこなたより燒度思ひつるにも、もし燒なば心得ぬ者は、城責なしと思ひあやまらんかとて捨置しなり、城中より燒落すこそ幸なれ、すて置べし、總責の時、橋の一筋が便になるものかと、御怒のあまりに、御側に有